

280) 別れの朝

ベッドの上に置き手紙して 別れの朝はまだ眠ってる
うしろ髪ひかれる想い 断ち切ってドアを開けば
水彩絵の具で描いたような ぼんやりとした街がひろがる
あの人もうだめだから わたしから去って行きます

もやい結びであなたの愛を ^{つな}繋ぎ止めても無駄なことだわ
^{そくばく}束縛も遠慮もいらない 今日からは自由にかえる
別れはいつも悲しいけれど 涙なんかは似合わないから
明日から気ままにやるの あのころのわたしになって

出逢ったころのふたりの写真 どうしてこんなに笑っているの
思い切り破り捨てるわ 倅せが^{ねた}妬ましいから
橋の上から川に投げれば 吹雪になって過去は流れる
未練などないといったら 強がりに聞こえるけれど

ふたり暮らした街を見下ろし 朝日の中をひとりで歩く
昨日まで肩を並べて 寄り添った木陰の道を
思い出だけが通りすぎてく すぎし^{きせつ}季節の香り残して
水色に溶けてく街に 新しい風を感じた